



よみきかせを楽しみませんか？

白山市立北陽小学校

読み聞かせのパワー 大人も子どもも楽しんで

なぜ読み聞かせをするのでしょうか。もう一人で読めるから、自分で読めばいいのでは、そう思われるかもしれませんが、もちろん自分で読む力をつけることもとても大切です。学校では、朝読書や授業中の読書は、お友達と一緒にではなく一人で読むようにしています。それでも、ご家庭でぜひ読み聞かせをしてあげてほしいと思います。『読み聞かせわくわくハンドブック』という本によると、読み聞かせとは次のようなものです。

- *目の前にいるだれかのために、生の声で心をこめて本を読むのが「読み聞かせ」。本を通して読み手と聞き手が結ばれて、ひとり読みではけっして得ることのできない満足感が、読み手と聞き手の両方に広がるもの。
- *子どもにとっての親の読み聞かせは、親が自分といっしょに絵やお話の世界を共感してくれていると感じるもの。そして同時に、自分に注がれている親の愛を肌で感じられるもの。

読み聞かせに学年は関係ありません。大人も楽しめる絵本もたくさんあります。自分のために読んでくれているという満足感、お家の方の愛情を感じることができる時間として、ぜひ読み聞かせをされてみてはいかがでしょうか。



2月に行った「家庭なかよし読書」のお家の方の言葉の中にもたくさんありましたが、読んであげる親の側が、絵本を見る子どもの視点に感心したり、成長を感じることもあります。忙しい毎日の中で、なかなか時間をとるのは難しいと思いますが、本を通して「楽しい」「面白い」という体験をたくさんさせてあげて、子どもたちに本の世界の素晴らしさを伝えていきませんか。



時にはお父さんの読み聞かせ
もお母さんとはちがった
雰囲気や味があって
すてきですよ！

まずは本に興味を 「読み聞かせ」と勉強を結びつけない

読み聞かせに集中してくれない、という悩みをお持ちの方もいらっしゃるかも知れません。『おはなし上手』で著者は興味のあることにはどんどん夢中になる子どもの性質をうまく本に向けてあげる方法を書いています。それは、**例えばストーリー以外のところで子どもが興味を示したところがあれば、親がそれに付き合っ一緒に話が盛り上がることで、「絵本はおもしろい」→「ほかの絵本も読みたい」とつながっていく、**という方法です。

ここでは著者は幼児について書いていますが、まずは本に興味を持つ、本は面白いものだと思うことが大切だということは、小学生にも言えることだと思います。

また、著者はお子さんの音読についても書かれています。著者は息子さんの音読を聞くときに、初めは細かなところまで指摘していたそうですが、そうすると本人は自分を否定されたように感じ、怒りながら音読をしていたそうです。ところが、ある時著者が内容に関する感想をつぶやくと、それを聞いた息子さんは、もう一度前のページに戻って読み始めたそうです。それからは、音読を聞くときに読み間違いや変な読み方をしても口をはさまず、感想を言うようにしたそうです。そうすることで、息子さんはお話の内容により関心がいくようになり、同時に「自分が読んだものをお母さんが聞いてくれた。楽しんでくれた」と思うようになったのでは、ということでした。

音読の場合はカードに声の大きさや速さなどを評価する欄がついているので、必ずしもこのようにはできないかもしれません。しかし、絵本を読むときには当てはまると思います。**自分がおうちの人に絵本を読んで喜んでもらった、その体験が本に興味を持つことにつながっていく**と思います。ついつい間違いを直したくなるのが親心ですが、親子読書はもともと音読の宿題とは違います。親も子も読み方のうまい下手は気にせず、本の世界を楽しんでいただければと思います。

なにを読んだらいいか迷ったら

基本的にはどんな本でも構わないと思います。お子さんとお家の方が楽しめるものを選びましょう。どんな本があるのか知りたいという場合は、読み聞かせに適した本を紹介している本もあるので参考にされてもよいと思います。以下に挙げる本もその一例です。松任図書館に所蔵があります。

親子読書地域文庫全国連絡会『おやちれんがすすめるよみきかせ絵本 250 低学年向 2003～2012』

絵本塾出版、2013年

金柿秀幸『幸せの絵本 家族の絆編』ソフトバンククリエイティブ、2011年

村上淳子『その本、読みたい！高学年』国土社、2013年

広瀬恒子『読みきかせ絵本 260 高学年向(2003～2009)』親子読書地域文庫全国連絡会、2009年

『心をつなぐ読みきかせ絵本 100(別冊太陽)』平凡社、2004年

参考文献 代田知子『読み聞かせわくわくハンドブック 家庭から学校まで』一声社、2001年
こがみほ『おはなし上手 どんな子でも夢中になれる読み聞かせの本』幻冬舎、2003年